
《世界》

Rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《世界》

【Nコード】

N2281G

【作者名】

Rei

【あらすじ】

遠い昔、大魔術師イーヴルによって《世界》は滅ぼされた。二人の少女 《クロ》と《シロ》の祖先により再生が行われたが、出来た《世界》はかりそめにすぎない。本物の《世界》を再生するために、《クロ》と《シロ》は《記憶》集めの旅をする

(前書き)

初めてのファンタジーのため、だめな所もたくさんありますが、最後までお付き合い下さい。

プロローグ

巡る、回る、廻る、めぐる

常に世界は巡っている。

そして、人は因果の巡りに囚われていく。

それは弱い人間ほど強く、深く、因果という甘美に溺れてしまう。

因果 それは前世の不幸と言われているが、囚われた人間には
甘く、心地よい誘惑。

果たして、どちらのいいぶんが正しいのか
それは人にとって害するものなのか、否か

答えは誰も知らない

だが、確実なのは、因果に囚われた人間は、必ず不幸になる、と
いうこと。

因果の甘い誘惑に唆された人間は、いつかは自分自身を見失い、
最後には生きる希望、目的を失ってしまうから。

だからこそ、私は敢えて問う

己自身を見失わずに因果と戦う覚悟があるのか、と。

因果に溺れ、囚われた人間を救う意志があるのか、と。

忘れるな。

因果はあくまでも前世の不幸だ。
「囚われたらもう逃げられない」

「時は来た。今こそ我が力を示す時だ！」

一人の男が両腕を拡げ、威厳の満ちた声で言い放った。

それを合図にして、一個の巨大な黒い塊が蠢きだし、分裂を始めた。人の目では捕らえられないほどの勢いで。

そしてものの数分で、その塊は、小さく丸い塊へと変化した。巨大なそれは小さくなると同時に、何も無い真っ白な空間を全て埋め尽くせるほどの数までへと増殖した。まるで複雑に絡み合った何かがおぼろげにされたかのように。

その塊らは猶も分裂を繰り返す。

数を増やしながらその塊らは、真っ白い空間を徐々に、徐々に完全な闇へと変えていく。

先程の男も徐々に、徐々にその闇に吞まれ、ついには闇と化してしまった。

これは滅び逝く前の《世界》が記した最後の《記憶》である。

「……というわけでこれら全てが《世界》の《記憶》です」

そう言つて男は、禍々しく光っている小さな球体が映っているスクリーンを、長い棒のようなもので指した。

正確には、その球体は何万ものと集められ、置かれているために禍々しく光っているように見えるのだ。

そしてカチツ、という音とともに、スクリーンが切り替わり、今度は二人の幼い女の子が写し出された。

その子達は、可愛らしく笑っていて、そんな笑みは、見る人全てに無垢という印象を与えるかのようであった。

「そして、これらが唯一世界を見つけられるとされた、《選ばれし者》です」

「ふーむ……これらが《記憶》の断片を集め、再び本物の《世界》を再生した者……か」

顎鬚をひたすらさすっている男は、唸るような声で言った。

この少女らは、人々から敬われる者。

しかしこの少女らの姿は誰も見たことがないのである。

「
」
まるで双子　クローンであるかのように思わせるほど、そつくりな顔をした少女が、見つめ合っている。

ただでさえ、同じ顔をした子が隣り合わせている、というだけで奇怪な事この上ないのに、その上、まばたきすらせず、ただ相手の目をジツと見続ける二人は、最早奇怪を通り越して見てはいけなもの、といったところだろう。

そつくり　とは言うものの、見る人全てに二人は対照的だと思わせるだろう。

一人の少女は、肌が浅黒く、大きな瞳と短く切られた髪は映すもの全てを吸い込んでしまいそうなほど真っ黒く、まるで《漆黒》という言葉は、この子そのものだと思わせるほど、どこまでも黒で飾られた子である。

そしてもう一人の少女は、色素が薄い所為か肌や瞳、さらには髪までもが雪のように白く、まるで汚れをまだ知らない天使のようである。

その少女もまた同様に《純白》そのものだった。

その様に思わせる原因は彼女らの服装にもあった。上着、ズボン、靴下、靴　全て彼女ら自身のトレードマークの色で統一されていたから。

彼女らは、お互いを《クロ》、《シロ》と呼び合っているのだが、そのことを知っているのは彼女らだけ。

少しでも彼女らの会話を聞いたことがあるならば、知ることが出来るのだが、彼女らは一言も話せない　いや、声を出せないのである。

その代わり、彼女らは、お互いの脳内で会話をする。

脳内の会話は異形の力なため、多大な集中力を要する。そのため、彼女らは会話をしている時、身動き一つしないのである。つまりは、先程から彼女らは会話をしていたのであった。

ねえクロ、今日先生の話ちゃんと聞いてた？

全然。つまんないから寝てた。

もう、ちゃんと聞かないとダメだよ。今日ね、どうして私達だけが、この授業を受けさせられてるのか、話してもらえたよ。

答えは？

《滅びた世界》の話はもう散々聞いたから知ってるよね？

《世界》は一度、イーグルという邪悪な心を持った大魔術師によって滅ぼされた。だけど、私達の祖先が、自分達を犠牲にして《世界》を復活させた、っていう話でしょ？ 不条理な話だからよく覚えてる。

それと確か、滅びた理由は、《世界》が《世界》であるために必要な《記憶》を失ったから。でも、かりそめの記憶を、私達の祖先が与えたから、《世界》は再生を遂げれたんだよね。

それがどうした？

散らばってしまった、本物の《世界の記憶》。それを見つめることが出来るのが、私達だけなんだって。だから、いずれは集めるであろうそれを、よく知っておく必要があるから、こんな授業

を受けさせられてるんだって。

また不条理な話だ。

確かに不条理かもしれないけど、ちょっと嬉しくない？ 私達にしか出来ない、それはつまり私達を必要としてくれてるってことでしょ？ 私、そんなこと言われたの初めてだから……

否。それは先祖みたく、犠牲にされるっていう意味。嬉しいわけない。

もう、クロはすぐそんな風にとらえるんだから。でも安心して、私は何も犠牲にしないよ、たとえ《世界》がまた滅びようと。

……でも集めに行ってる間は、私達には楽しいこと何一つないでしょ？ やっぱ、そんなの喜べない。

大丈夫。だってあたしはクロといるだけで楽しいから。旅は私達だけで行くみたいだからね。

旅……外に出られるの？

そうだよ。クロ、前に一度でもいいから外に出たいって言ってなかった？ いいチャンスだとは思わない？

シロと一緒に外に出たい。外の綺麗な景色、シロと一緒に見たい。

私もクロと一緒に見たいな。だからもうそんな風に言っちゃダメだよ。

シロがそう言うなら、もう言わない。

これが、話す事が出来ない彼女らの会話であった。

第二の記憶

そして数日が経ったある日、彼女らはついに旅に出るよう、言われた。

今まで一度も外に出たことがない彼女らは、やっと外に出られるという嬉しさから、快く承諾した。危険すら顧みずに。

旅の目的は至って簡単。《世界の記憶》の断片を見つけて回収する事。

《世界の記憶》は、小さな玉の形をし、いずれも色付く光を発している。

それらは、赤、黄、緑、青、紫 《記憶》の内容によって、さまざまな色に色分けされている。例えば、赤く光るのは《戦渦》に関する《記憶》。緑ならば《大地》に関する《記憶》。

だが、多くのそれらは、人の記憶の中に寄生して存在するため、本来の姿形はしておらず、変わりに人が光っているように見える。

そんな人を見つけ次第、《迷妄離脱》の儀を行い、人から切り離

せば、彼女らは無事回収することが出来る。

幾千もの数あるそれらを、全て回収するには、多くの年月を犠牲にしなければならぬのだが、彼女らにとって、そんなことはどうでもよかった。

クロ、やっと外に出れるね！

シロ、嬉しそう。

そういうクロだって嬉しそうな顔してる。ねえクロ、これからは、二人だけで生きていかなければならないけど、私達なら大丈夫よね？

二人でならすべて上手くいく。

そう言って彼女らは旅立った。

第三の記憶

旅を初めてから、十数年の歳月が経ったこの日に、彼女らはすべ

ての《記憶》を集めた。

二人にとつて、旅は決して生易しいものではなかったのだが、それでも二人で力を合わせ、なんとかここまでやってこれた。

残された彼女らの最後の仕事は、すべての《記憶》を繋ぎ合わせるだけ。

遂にこの日が来たね。

辛かったけど、シロがいたから頑張れた。

私もそうよ、クロ。……ねえクロ、クロは《声》を失って悲しいと感じたことある？

……ない。別に《声》がなくてもシロと話せるから困らない。

そっ……か。あたしは何回か感じたよ……

……

旅の最中にさ、何度か《歌》っていうのを聞いたよね。それがね、すっごく綺麗で、だから……だからすっごく羨ましくて、心が涙でいっぱいになったの……

こんなのおかしいよね？　ずっとクロだけって……そう思ってたのに……

そのことをクロは知っていた。

《歌》というものを聞く度に、シロの顔に影が差すことを。

そのことを知った時、シロに必要なものは、自分だけではないのだと、シロに対し寂しさを感じもしたが、別に自分を必要としないわけではないのだと言い聞かせ、気付かないふりをし続けてきた、クロ。

全てはシロの望むままに　それが彼女、クロという少女の願いだから。

シロが《声》を望むならば、それでもいいと思っていたのだ。

最後の大仕事の前に彼女らはいろんな話をした。
旅の思い出や小さい頃の思い出、嬉しかったことや悲しかったこと。

一緒に経験したことの方が多くはすなのに、それぞれから話しだされる思い出は、ちよつとずつ違う。

見たこと、聞いたこと、感じたことは、たとえ一緒に経験したとしても、同じではないから。

《クロ》と《シロ》は違う人間だから。

そろそろ旅に終止符をうつうか。

シロから出された旅の終わりの合図。
クロも返事をする代わりにうなずく。

確か、太古からある大樹　ティンバに私達が集めた《記憶》に村長が持つてる《記憶》を含めた全ての《記憶》を捧げ、《魂繋ぎ》の儀をすればいいんだよね？

合ってる。早く終わらせて、また昔みたいに村で遊ぼう。

うん。じゃあ行こうか、大樹ティンバの元へ。

最後の記憶

古より存在する大樹ティンバ。

その大きさは二人の想像をはるかに上回るものだった。

大きい。

……うん、すごく大きくて古い。

感動をお互い伝え合う二人。

そしてしばらく大樹を眺めた後、彼女らは顔を引き締めた。

そろそろ《世界》に話し掛けようか。

うん、そうする。

声が出ない彼女らは脳内から話し掛けた。

我が名は《リリ》、《汚れを拒む者》

我が名は《フィルス》、《汚れを支配する者》

この大樹には、世界そのものが宿っていると言われている。

見る人によつてそれはさまざまな形に変化するのだが、彼女らの前に現れたのは 鳥であった。

白鳥と鳥が混ざりあった、不思議な鳥であった。

《世界》は彼女らに呼び掛けた。

「禁忌を犯し、我が器を滅ぼした大罪人イーヴルの血を受け継ぐものよ、汝ら、何をしに来た、答えよ。答えによつては、今ここでイーヴルの罪、償ってもらうぞよ。」

《世界》によれば、彼女らはなんと、《世界》を滅ぼした大罪人イーヴルの子孫であったのだ。

つまり彼女らは、《世界》を滅ぼしたイーヴルの子孫であり、同時に、その後《世界》を再生させたアダムとイヴの子孫でもあったのだ。

動揺を隠せない彼女らだが、今はやらねばならないことがある。

彼女らはここに来た目的を話す。

我らは貴女様が無くされた《記憶》を取り戻したため、《魂繋ぎ》の儀をしにはるばる遠い所からやって来た。どうか、儀をさせて下さい。

「何、妾がそんな嘘に騙されるとでも思ったか、童共。その様な嘘をつかれるとは、妾も見くびられたものだ」

嘘ではございません。我ら二人は、《世界》の再生を心底望んでおります。だからどうか、どうか儀をさせて下さい。

「……ふん。そう言ってまた妾を滅ぼすのだろう。だがいいぞ、妾は慈悲深い。汝らが妾の出す条件をのむならばな、かっかっかっ」

正直彼女らは迷った。今までだったら、何も犠牲にしないと思っていたのだが、先程聞いた事実　自分達の祖先であり大罪人のイヴルのことを考えると、やはりその条件をのむべきなのかと心が揺らぐ。

……ここまでこれたのは、クロがいてくれたから。だから私は、クロ以外なら何を差し出しても構わない、たとえ自分の命が奪われようとも

シロと同様。シロを奪うんだったら許さない。

そう言っただけなら彼女らはお互いの手を取って繋いだ。

「かっかっかっ、妾も汝らの価値のない命などには興味などない。妾が出す条件とは、汝らの《過去》と《未来》。同じものを二つはいらぬ、だから互いにどちらかがどちらを差し出すか決めよ」

彼女らは困った。まさか自分らの《記憶》を、差し出せと言われ
るとは思ってもいなかったみたいだ。

二人の間に沈黙が訪れた。

そしてしばらくしてから、シロが沈黙を破った。

ねえクロ、私が言ったこと覚えてる？

うん、全部覚えてる。

そっか……うん、それなら安心だ。

……？

私ね、《過去》も《未来》も捧げようと思う。

ダメ。そんなのあたしが許さない。それだったらあたしが

黙って聞いて！

シロを捕らえた真つ黒な瞳に動揺が映る。

シロは泣きそうになるが、今は泣かぬまいと、手のひらに力を入れ、グツとこらえた。

クロ、よく聞いて。

私はクロが好き。本当よ？ だからクロに犠牲になってもらいたくないの。きつとクロも同じことを考えててくれたと思うけど、私にはクロと同じぐらい《声》も必要なの。だけど何をしたらって、どれぐらいの年月が経とうと、私は《声》を得ることは出来ない。それに加え、クロまで失ったら私……生きていく自信無いよ。

……

クロは、そんな私に比べたら強いから、たとえ今の私がいなくとも大丈夫でしょ？

大丈夫なわけない。あたし……独りぼっちになる。シロがない《世界》なんて本当の《世界》なんかじゃない！

そこまで言われ、シロは気付く。

クロになんて酷いことを言ってしまったのだ、と。いろいろんことが流れ込み、ついにシロは泣いてしまった。

クロ……クロ、あのね。私、本当は、怖かった。さっき、クロが、嫌だって、言っ、くれなかつたらって、考えると、すごく、

怖く、なった。クロも、クロと、過ごした《記憶》も、忘れちゃう、なんて、嫌だよ……！

……なら答えは一つ。答えよう、《世界》殿。我は、いや、
我らは

結局彼女らが選択した答えは分からない。

《世界》の記憶には抜け落ちたものがいくつかあるのだが、彼女らが選択した答えも抜け落ちている。

ただ聞いた所、大樹ティンバでいつも仲良く遊んでいる女の子が二人いるそうさ。

その子供は何を聞いても返事はしてくれないけど、遊びたいと言えば仲間に入れてくれるそうさ。

そして次の日には昨日あったことを全て忘れ、同じことをまたするそうさ。

まるでいつも、《過去》でも《未来》でもない、同じ《今》という時を繰り返しているかのようさ

(後書き)

いかがでしたか？きっと途中の旅の部分がほしい方もいらっしゃると思いますが、なんせ初めてファンタジー作品を書くため、私にはそこまでは無理でした。最後彼女らがどうしたなども含め、御想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2281g/>

《世界》

2010年12月13日20時20分発行